

ITP 派遣報告書

1. 氏名

藁科 智恵 (わらしな ちえ)

2. 派遣先機関名

ジャダブプル大学 (インド)、マイソール大学 (インド)、マールブルク大学 (ドイツ)

3. 派遣期間

2008 年 2 月 27 日～2008 年 4 月 26 日

4. 研究テーマ

20 世紀前半ドイツの知的状況におけるアジア的モメントー知識社会学的視点から

5. 研究の概要

修士論文では、R. オットーの『聖なるもの』(1917) を当時の知的状況の中に置きなおすことを通じて、20 世紀前半ヨーロッパにおいてそれまで自明であった「キリスト教信仰」というものが社会に占める位置が大きく転換していく状況が解明された。そのような状況下、オットーは、「宗教的人類同盟」を設立することにより、仏教、イスラム教等、キリスト教以外の宗教とも「宗教」という基盤で同盟を結ぶことを呼びかけている。また、宗教学および関連分野の研究者が集まる国際的なエラノス会議にも宗教学者 M. エリアーデや心理学者 C. G. ユングとともに関わっている。以後継続的に開催された同会議を通じて、多くのイスラム学者、仏教学者等により、宗教学におけるヨーロッパとアジアの知的交流がなされた。

さらに、このエラノス会議が開かれたアスコーナという地には、1900 年頃から、非ヨーロッパ的志向性を持つコミュニティが出現していた。そこには、学者、アナーキスト、芸術家等、が集まっており、非ヨーロッパ、特にアジアに対する強い関心が見られる。オットーも、エリアーデもインドに旅行、留学等しており、インドに対して強い関心を持っていたことが窺える。

修士論文の主題をさらに発展させるために、オットーの思想において「アジア的」なものがどのように受容されていたのかを解明することが目指される。

6. 具体的成果

2008 年 2 月 27 日から、3 月 18 日までインドに滞在した。コルカタでは、ジャダブプル大学のシュバー・ダスグプタ先生から、インドのヨーロッパへの影響に関わる資料に関しての指導を受けた。マイソールでは、マイソール大学のレカ・シャルマ先生を通じて、ヴ

イーヴィカナンダ・インスティテュートのナガラジャ・ラオ先生から、20 世紀前半のオットーが滞在した頃のマイソールに関わる情報を得ることができ、マイソール大学設立に至る歴史に関する資料も得ることができた。

2008 年 3 月 18 日から 4 月 25 日まで（うち 4 月 7 日から 4 月 14 日までスイスに滞在）ドイツ・マールブルクに滞在した。マールブルク大学では、宗教学部のエディット・フランケ先生、カティア・トリプレット先生に会い、9 月からの滞在、研究に関してアドバイスを受けた。また、宗教学博物館にあるオットー・アルヒーフの使用の許可を得ることができた。

スイス・アスコーナでは、モンテ・ヴェリタのカーザ・アナッタという 20 世紀前半のモンテ・ヴェリタにおけるコミュニオン運動での様子を展示している博物館を訪れた。アスコーナに関する書籍を得ることもでき、またその当時のコミュニオン出身の人から直接話を聞くこともできた。

なお、滞在期間中の具体的日程は、以下の通り。

2 月 27 日 日本を出国

2 月 28 日～3 月 18 日 インド滞在

その間、2 月 28 日から 3 月 5 日までは、コルカタ滞在。3 月 6 日から 3 月 15 日まで、マイソールに滞在し、3 月 16 日から 3 月 18 日までコルカタ滞在。

3 月 18 日～4 月 25 日 ドイツ滞在

その間、4 月 7 日から 4 月 14 日まで、スイス・アスコーナに滞在。

4 月 26 日 日本に帰国

7. 今後の課題・問題点

今回のドイツでの滞在期間中は、英語によってコミュニケーションをとっていたが、ドイツ語によるコミュニケーションの方が、より円滑な滞在、研究活動を行えることだろうと思われる。ドイツ語の運用能力を高めていく必要性を感じた。

また、20 世紀前半における「アジア的なもの」の受容を見ていく上で、当時のドイツにおける広い視野を得ることが今後の課題であると思われる。9 月からの派遣期間中の指導を受けながら、さらに研究を進めていきたい。